

という唱歌（明治45年尋常小学唱歌）にうたわれた家族団らんによる全人教育の風景ではなく、燠をおとした朝方のもの寂しい風景である。これは、古代織物といわれる楯布を織り続けている羽越国境の山村山北村、栃の実を川原一面に干していた奥越の山村・大野市旧五箇村を訪ねた後、生れた私の心象風景である。

それらの地域では科の木の樹皮を釜で煮たり、トチの実を合せたり、紙漉きの原料である楮を軟かくする際に囲炉裏でできた大量の木灰が使われていたのである。夜なべ仕事をする際の燈火として囲炉裏で焚かれた薪炭は、針葉樹や照葉樹でなく、火力も強くやにもでないブナ帯の落葉広葉樹であった。その木灰を便ってこそ、楯布・藤布・葛布などの樹皮のあく（灰汁）ぬき、トチやナラのあくぬきが可能になったのであろう。しかし、樹皮の衣料化、堅果類の食糧化には半年ほどの長い準備期間が必要である。朝方の囲炉裏を心象風景として考えることによって、経済的にあわない伝統的生業を捨てて多くの人々が故郷を離れ、多くの山村が過疎の波に洗われている実態がよりよく解釈できると考えた次第である。

そういえば、会津の杓枝岐や裏日光の栗山村の囲炉裏の上に燠製にされたサンショウウオやイワナ、別の場所では杓子が、ずらっとならべられた様子も「いろり」にまつわる忘れられない光景である。

## 立 体 視

三 上 岳 彦

前号の談話会要旨に浅井先生が立体スライドの利用について書いておられたが、私もスライドを含めた写真の立体視にはかねてから関心をもっていたので、大変興味深く読ませて頂いた。地理学分野では、空中写真の実体視などで3次元的な写真解析の重要性が認識されているが、フィールドで撮影する写真については依然として1枚の平面的写真が幅をきかせているようである。そこで、私自身が日常試みている立体写真の撮影法とその立体視について簡単に紹介してみたいと思う。

私が立体写真に興味をもち、自分でも試みるようになったのはもう20年以上前のことであるが、米国製のステレオ・ビューアーなるものを覗いた時に始まる。一見双眼鏡のようなその装置を通して、未知のアメリカ各地の風景が眼前に手にとるように浮かび上がってきたことに興奮を覚えた。それは直径15cmほどの円盤にミニサイズの立体カラースライドを交互に配置したもので、原理的には、空中写真の実体鏡による実体視と何ら変わらない。既成の立体写真に飽き足らなくなって、それ以来いろいろな方法で立体撮影を試みるようになった。

誰もが思いつくもっとも簡単な方法は、ある被写体を一定の間隔で2枚の写真に撮るというやり方である。撮影間隔は、原理的には两眼の間隔に合わせて6cm程度で立体視可能であるが、山岳などの遠距離の被写体を立体的に再現したい場合にはさらに撮影間隔をひろげる必要がある。被写体までの距離の50分の1を目やすにするとよいという説もある。近距離のものに対してあまり間隔をひろげると、空中写真のように奥行きが誇張された映像ができあがってしまう。いずれにしても、この方法はカメラ1台さえあれば何の装置も必要とせず誰にでも立体写真を撮ることができるので、ぜひ1度試み

られることをお勧めしたい。ところで、このように1台のカメラで2回撮影をするために、被写体は静止しているものに限定される。自然地理分野ではあまり問題はないかもしれないが、人文地理分野で動く被写体を立体撮影したい場合にはどうしたらよいだろうか。外国製のカメラで2眼を並列に備えた専用カメラがあるが、35ミリフィルムを使用できないという欠点がある。2台のカメラで同時に撮影するという方法もあるが、すべての費用が2倍になるのが難点といえよう。私の場合、A光学製の一眼レフカメラを使用しているが、この会社ではレンズの前に簡単にとりつけられる立体撮影用アタッチメントを付属品として用意しているため、もっぱらこの装置を愛用している。ミラーの組み合わせでハーフサイズの2枚の立体視用写真を撮ることができるようになっており、撮影後は2枚の画像が1枚のスライドにマウントされ、専用のビューアーや偏光グラス利用の映写装置で立体像を再現することができる。地理分野に限らず、例えば野外での動植物の生態写真などに有効であると思われる。私は野外での植物の近接撮影にこの装置をよく利用している。

当教室には浅井先生の購入された偏光グラス使用の立体スライド映写装置が備えられている。1人でも多くの方がこの装置を通して立体視のすばらしさを味わっていただきたいと思う。

## 娘 の 卒 論

貝 山 久 子

次女は目下大妻女子大学児童学科4年に在学中であるが去る12月20日に何とか卒論も提出したので、あといくつかの期末テストにパスすればめでたく卒業ということになった。

長い間学生さんの卒論製作を脇から眺めて来たが娘の卒論ははじめて（長女は卒業製作が課せられて居りそれはそれなりに大変だったが——）の経験なので、その経緯を記してみたいと思う。

卒論のテーマと指導教官の決定は3年生の秋に早くも行われる。全教官と3年生全員が11月に武蔵嵐山の国立婦人教育会館に一泊して全くフリーな形で学生と教官が話し合いをし、内容によって指導教官がきまる、といっても児童教育学専攻、児童学専攻合せて120人という大世帯のこと故、6人の教官に単純平均しても20人という数になるので、あまり片寄らぬよう調整が行われるようである。かねがね娘の性格からみて、膨大な資料を読んで論文をまとめるというのではなく、自分の足でオリジナルなデータを集めて結論を導き出すような事をやった方がよいと思う、と意見を述べておいた。帰宅して幼児の造形活動を中心としたことをやることに決めた、と云ったが、その他に幼児向けの絵本を作りたい希望をもっていたようである。

大妻の児童学専攻学生は幼稚園教諭と保育士の2つの資格がとれることになっている。そのため3年生で2ヶ所の収容施設と保育園、4年生で幼稚園における教育実習が課せられている。実習園は早くから決まっているので、娘は4年生になるとすぐ園長さんをお願いして週一度対象児（5才児1クラス27名）の観察と実験を行うようになった。

6月には3週間の教育実習があり、その後も引続いて観察・実験は行われた。娘のテーマは“幼児の造形活動と他領域との関連についての一考察”というもので、他領域とは知能・運動能力・社会性